

7

藤木流の鍼灸書『信左隨身宝』の序文について

竹内 尚

日本鍼灸研究会

【緒言】

演者所蔵の抄本『診脈要語』の後半に、『信左隨身宝』と題する鍼灸書が合綴されている。京都の儒医・堅田絨造(1746~1812)が撰した書で、その巻首に、「故従五位上鍼博士藤木土佐守温故先生口伝」と記されている。藤木氏は、御園意斎の門人・成定(1557~1635)を開祖とする、江戸初期以降、鍼博士を世襲した名門で、土佐守とは成興(1713~1779)のことである。藤木流は今日ほぼ伝わらず、本書は、その一端を記す稀有な文献である。よって、ここにその序文(割注を除く)を訓読して、藤木流研究の一助とする。

【書誌】

無辺無界、毎半葉11行22字、注文双行。全37葉のうち、『信左隨身宝』16葉半。「信左隨身宝目録」半葉、「温故先生略伝」および「脈訣評林七診之法」半葉、「隨身宝序」2葉半。序末に「寛政庚戌仲夏／東都田馮選」、第24葉裏に「信左隨身宝」、「故従五位上鍼博士藤木土佐守温故先生口伝」、「門人 堅田絨造馮 謹著」と記す。

【訓読】

隨身宝序。

夫れ鍼の道為るや尚し。昔者黄帝、毒葉砭石を用うる無く、微鍼を以て、経脈を通じ、気血を調えんと欲し、先ず『鍼経』を立て、九鍼を詳らかにし、九變、三刺、五刺、十二節、十二禁の法を明らかにす。惜しいかな、其の伝、堰没して、詳を得ること難し。飛霞、既に之れを歎く。然れども、後世、別に四要、五義、十四法なる者有り、粲然として観るべし。故に我が温故先生、斯に刻意し、遂に心と手に得る所を、口を以て伝授す。馮曰う、尚びて復た堰没せしむる莫かるのみと。馮、嘗て脾病有り、一旦にして朝露に先んじ、溝壑に填まり、授かる所を闡明すること能わざるを恐れ、長く黄泉を含恨す。是を以て固陋を忘れ、『隨身宝』一編を著し、以て其の伝を広む。越人に言有りて曰く、「鍼を為す者は其の左を信ず」と。我が管鍼の法も亦た、復た左手に原づき原づく。按挙、理に違えば、則ち鍼の肯綮を失し、膏肓を重ねるなり。凡そ刺の時に当りては、先ず口に鍼を含み、左手の食指を以て、鍼する所の処を痛だ厭按し、即ち其の食指を側て、母指を將て鉗合す。又た右の母食の二指、挟みて管頭を持ち、含む所の鍼を套い、其の柄を二指に接すること二三分許り、管を併せて挟み持ちて、管嘴を左手母食二指の鉗合の間に嵌む。右手食指を將て、乗勢一弾、鋒をして皮を洞かせしめれば、乃ち管を抜却す。左手二指は、挟みて以て鍼頭を御し、按挙して氣至を待つ。右手大指に柄を托し、食指を用いて靡かに推して入鍼す、意は蚊虻が止まるを觀て、邪を下すこと勿れ。初め皮を洞くは天の分なり、停すること十息。次いで肉中に至れば人の分なり、亦た停すること十息。筋骨の間に至れば地の分なり、此れ極処を為す、停すること十息。然く浅深は宜しきに随いて、各々用うる所有り、氣至れば止む。鍼入の後、沈重滯緊し、魚の針を呑むが如く、或いは沈み、或いは浮きて動ずる者は、乃ち邪氣正氣、鍼頭に潮まるなり。随いて乃ち出鍼す。若し氣、未だ到らざれば、則ち其の数を問うこと無く、鍼を將て動揺搓転す。之れを催氣と謂う。之れ氣を催しても至らず、鬆脆虚慢として、豆腐を刺すが如き者は、必ず死して治せず。其の氣、速き者は、効も亦た速くして、病、愈え易し。其の出鍼も亦た慢々と搓転し、微かに鬆むを待ち、徐ろに転引し、補瀉を問わず、按じて其の穴を閉ず。若し鍼、氣、固渋して、之れを推せども動かず、之れを転ずれども移らざるは、此れ邪氣を為す。其の鍼を吸抜し、亦た徐ろに搓転し微かに下し、而る後に之れを出す、強いて之れを引き出す勿れ、気血を傷ることを恐る。故に出鍼は緩を貴び、太だ急すれば氣を傷る。下鍼は遲を貴び、太だ急すれば血を傷るなり。誠に夫れ鍼なる者は、経脈を通じ、気血を調えるの至宝なり。故に名づけて「隨身宝」と曰う。

寛政庚戌(1790)の仲夏、東都の田馮が選。